

絵本にみる「仕事とはどのようなものか」(3)

齊 藤 毅 憲

1. はじめに

絵本において“ワーク・モチベーション”はどのように考えられているのであろうか。ワーク・モチベーションとは、抽象的にいうと、人がどのような考えをもって仕事にとり組んでいるかということであるが、それは、人間はなんのために働くのか、どのような目的（ゴール）をもって仕事をするのか、あるいは人間がなぜ仕事に駆りたてられ、動機づけられるのかを問うことである。本稿は、この視点で絵本を検討することをねらっている。

現代におけるワーク・モチベーションのとらえ方は、仕事の選択や実施に関して、働く側の主体性を大切にしている。「生理的欲求」や「安全性の欲求」はほぼ満たされているので、それよりはむしろ「自我や自己実現の欲求」の充足のほうが重視されており、さらに働きがいや生きがいがある仕事を行う際には重要とされている。

では、絵本ではワーク・モチベーションをどのようにとらえているのであろうか。絵本で描かれる話は現代ではなく昔の時代が多く、また、登場人物は人間のほかに、動物や人工物も対象となっており、それらは人間とほぼ同じ存在として描かれている。そして、絵本の世界は現代とちがいで、経済的には豊かではなく、仕事や職業は農山漁村の第一次産業が中心となっている。

対象となる絵本は無数にあるが、そのなかから今回はつぎの5冊を取りあげる。

- ①『くった のんだ わらった』（ポーランド）
- ②『山いっばいのきんか』（中国）
- ③『石のししのものがたり』（チベット）
- ④『炭焼長者』（日本）
- ⑤『いっすんぼうし』（日本）

2. 『くった のんだ わらった』のオオカミの動機づけ

ポーランドの民話である『くった のんだ わらった』（Full Stomach, Much Drink And Homeric Laughter、内田莉紗子・再話、佐々木マキ・画、1977 年、福音館書店）は、仕事を遂行する際の人間の基本的な欲求を教えており、きわめて示唆的である。

佐々木の描く絵はポーランドののどかな農村風景であり、全体が緑（グリーン）を基調としている。うす緑のグラデーションで描かれ、ゆったりとした印象を与えていて、貧しさをあまり感じさせない。そして、登場する動物と人間の表情は実に豊かであり、いくら見てもあきることはない。

話を要約すると、モグラに自分たちの巣、つまり家が壊されそうになって危険を感じたヒバリの夫婦が、オオカミにモグラを追いだす仕事を依頼し、それをみごとに成功させるというものである。ヒバリは安心し、オオカミも心から満足している。具体的なストーリーは、以下である。

牧場の静かな草むらの片隅にヒバリの夫婦が巣をつくり、卵を産んで抱きはじめている。ところが、モグラが周辺の地面を掘りはじめたので、ヒバリの家はグラグラ揺れだしてしまう。そこで、オスのヒバリは森に住むオオカミにモグラの追いだしを依頼する。オオカミはこれを引きうけるが、それには条件があって、それが実現したら追いだすという。ひとつは、ご

ちそうをたらふく食べさせてくれること、もうひとつは、うまいビールをたっぷり飲ませてくれることである。

ヒバリにとって、このふたつの条件をのんで実行することは大変な難題と思われるが、「知恵」を働かせて、なんとかクリアしていく。まず、ごちそうについては、村の人びとが集まって結婚式のお祝いをしている家にオオカミを連れて行っている。人びとが音楽をかなで、ごちそうを食べている部屋にヒバリが入っていくと、「しあわせな とりだ」、「つかまえろ！」と口々に叫ぶ。そして、ヒバリが窓から外へ出ると、人びとも外へ出てヒバリを追いかけていく。その間にオオカミはカラッポになった家に入って、ごちそうをつぎつぎにたいらげる。

ふたりが森に帰ると、オオカミは「くった くった。まんぷくだ。くったら のどがかわいたぜ。うまいビールを おもいきりのませてくれ」という。ヒバリは追加された要求にがっかりするが、なんとかしようとする。

再び村のほうへ向かっていくと、道にビールの樽を積んだ荷車がやってくる。ヒバリは御者（ぎょしゃ）の頭にとまっておでこをつつき、そのあとビールの樽にとび移る。御者はカンカンになって怒りだし、棒をつかんでヒバリめがけて力いっぱいふりおろす。ヒバリがそこからひらりとかわして逃げると、棒が古い樽のひとつに当たり、たががはずれてバラバラになってしまい、そのはずみにビールは川のように流れだす。そのとき、オオカミが茂みから飛びだし、御者はびっくりして逃げだす。こうしてオオカミは流れ出たビールを思う存分飲むことができたのである。

森に戻ると、「ごちそうも くったし、ビールも のんだ。さて、そうになると わらいたくなかったぜ。おもいきり おもしろいものを みせてくれたら、こんどこそ もぐらをおっぱらってやろう」という。ヒバリはオオカミのずうずうしさにあきれるが、結局これをのまざるをえなかった。そこで、ヒバリは少し離れたところにあるお屋敷にオオカミを連れていく。

そのお屋敷のベランダのテーブルのうえには、クリスタルガラス製の大

きなロウソクたてがあり、それは太陽に照らされてきらきら光って美しく、お屋敷の殿様がとても大切にしているものであった。ヒバリがこのロウソクたてのうえにとまると、殿様は真っ赤になって怒りだし、手に持っていたステッキをふりあげてヒバリをなぐりつけようとする。ヒバリがひらりと舞いあがると、ステッキはロウソクたてに当たり、それはこなごなに壊れてしまう。

オオカミはその光景を見て、おなかをかかえて笑いころげる。そして、そのあとオオカミは牧場に行き、約束どおりモグラを追いだしている。かくして、ヒバリは無事に卵をかえすことができる。

以上がこの絵本のストーリーである。ヒバリのどこまでも冷静な表情に対して、オオカミの満腹のおなか、ビールを飲む姿、そして、とりわけ背中を地面につけて足をばたばたさせて笑いころげる姿は、ほしいもの、つまり欲求の対象が充足された状態を示しており、強烈な印象を与えている。

いつの時代の話であるかは不明であるが、いまではない。牧場で働く人びとは機械やトラクターなどではなく、馬や道具を使っている。そして、ビールも荷車で運び、樽は木製である。

パーティをしている人びとは、農村に暮らし、すべての人がパーティよりも幸せの鳥を追いかけるような普通の人たちである。それに対して、太っちょの殿様は、おそらくその地域の支配者であろう。支配者と被支配者が明確に存在した時代であるとすれば、支配者が大切なものを壊され、それがオオカミの笑いのまとなったことは、被支配者としてこれほど胸のすくことはないであろう。

今日的に言えば、ヒバリが自分の家を壊されそうになって危険を感じたとき、相手方であるモグラに直接または間接的にコンタクトをとって自分の言い分を説明し、納得してもらうように交渉することになるが、そのような方法をとっていない。自力では追いだすことができないので、モグラへは連絡せずに、オオカミの力を借りている。

ヒバリがこのような強硬手段をとった理由については定かでない。おそらく、モグラに自分たちの不安や苦情を述べても、モグラは相手にせず、自分勝手に地面を掘りつづけ、地面の上のことを考えてくれることはない と判断したのであろう。

そして、ヒバリの行動のなかでもうひとつ注目すべきは、いささか荒っぽいと思われるような「知恵」を使って実行していることである。モグラを追いだすという仕事を引き受ける代わりにオオカミがだした条件は、普通に考えると、ヒバリにはどう見てもきわめて困難なものばかりであった。ごちそうを十分に用意すること、ビールを調達すること、思いつきおもしろいことを見せることは、どれも、小さく非力なヒバリにとって自分の力だけの実現はむずかしかった。

自力による問題解決が困難だと考えたとき、ヒバリは環境（周囲）にチャンスを見つけだすという知恵を使って乗りきろうとした。結婚式のごちそうやビールを運ぶ荷車を利用し、これによってオオカミの“くった のんだ”の欲求を満足させている。しかし、オオカミの欲求がさらに拡大し、“思いつきおもしろいものを見せる”ことをいわれ、支配者・権力者が一番大切にしているものを壊すことで、オオカミの“心の満足”を満たしている。

ここでは、パーティをやめさせたり、ビールの樽やロウソクたてを壊したのはヒバリ自身ではないが、そのような行動を誘発させたのは明らかにヒバリであり、この誘発行動を短時間に実行したところにヒバリの知恵がある。ただし、このような知恵の実行（やり方）が倫理的に許容されるかどうかという問題はあるかもしれない。

3つの行動をとったことで、ヒバリはオオカミの生理的欲求（飲食）と心の欲求を満足させ、その結果モグラの追いだしを果たしている。これにより、ヒバリの最大の目的であり、自身の欲求でもある、卵をかえして命をつなげることができる。

つぎに、この仕事を引きうけるときのオオカミの動機づけについて見ていこう。ヒバリとオオカミは、モグラの追いだしというタスク（仕事）の

解決において、委託と引きうけの關係にあり、オオカミはこの仕事を引きうけるという請負關係のもとにある。

この場合、ヒバリはオオカミを「追いだしのプロ」と見こんで仕事を委託し、オオカミはそのプロであることを自認しているとみてよい。オオカミはモグラの追いだしが容易であることに確信があるので、仕事を行う前に報酬の提供（事前支払い）を強要している。

一般に、この種の請負關係では、報酬はタスクが達成されたあとに支払われる「成功報酬」であり、事前支払いは請け負うことを約束（契約）したことを示す、一時的な少額の予約金である。しかし、オオカミはタスク完了後の支払いではなく、事前支払いを要求している。

ところで、オオカミはこの仕事の遂行になにを求めているのであろうか、あるいは、なぜこの仕事を行う気になったのであろうか。“くった のんだ”と満足しているところをみると、いわゆる「生理的欲求」を満たすことが、この仕事の最初の動機づけであることがわかる。食べ物と飲み物を口に入れないと生存できないので、生理的欲求は基本的な欲求であり、その充足がまず必要となる。

仕事を委託した側のヒバリが、自分の家が壊されそうになる危険を回避したいと思って、「安全性の欲求」の充足を優先しているのに対して、オオカミは食べたり飲んだりして空腹を満たすこと（つまり“おなかの満足”）を重視している。森に住むオオカミは強者であり、荷車の御者にもおそれられる存在であるが、そのオオカミでさえ、生理的欲求が不十分であったのである。

そして、オオカミは生理的欲求が満たされたあとの段階で、思いっきりおもしろいことを見て笑いたいと思うようになるが、これは“心の満足”というべきものである。要するに、生理的欲求やヒバリが重視した安全性の欲求が満たされたのちにでてくる、ふたつの欲求の上位に位置する、“心の満足”があることを主張している。

オオカミの笑いは、この絵本の原書名である“高笑い”（Homeric

Laughter) であり、思いっきりおもしろい対象を見ることにより発生している。それは、支配者である殿様が大切にしているものを、みずからの手でこなごなに壊してしまったのを見て笑っており、この高笑いは、壊れたものを見るという視覚的な刺激によってまず生じ、さらにこなごなに壊れる音と、殿様が怒って発した言葉「なんということだ！ ことりのくせに わしのたからものに とまるとは！ ころしてやる！」も、高笑いにつながっている。

心をもつオオカミは、支配者である殿様がイライラしたり、困った表情をするのを見て喜びの感情が発生し、普通の笑いよりも強い高笑いを発する。もしかすると、これは支配者に抑圧されつづけた大衆がもつ感情と同じものかもしれない。そして、この喜びの感情こそが“心の満足”を充足させている。

笑いは顔に表出されるのが一般的である。しかし、この絵本におけるオオカミは、あお向けになって背中を地面につけ、両手両足をバタバタさせて笑っており、体全体を使って喜びを表現している。絵本のこの最終場面は、オオカミが心の底からおもしろがり、喜んでいる姿で描かれており、伝わるインパクトはきわめて大きい。書名の“わらった”の内実は、まさにこのようなものである。

さて、オオカミの仕事への動機づけは、先に述べたように、生理的欲求の充足が中心である。オオカミがなにを求め、なぜ仕事に動機づけられたかという、生理的欲求を充足させるために、食べたり飲んだりしなければならなかったということである。つまり、働いて報酬を得なければ、生理的欲求を満たすことはできない。

さらに、それだけでは不十分であり、心の満足や喜びの感情をもつことも大切であることをこの絵本は教えている。“くった のんだ”はあるのが当然である。しかし、それだけで生きることはできず、それとともに、“わらった”が必要なのである。

3. 『山いっぱい きんか』における“欲をかきすぎない”という教訓

『山いっぱい きんか』（文・君島久子、絵・太田大八、童話館出版、2005 年）は、子どもたちが喜ぶような絵で描かれた、中国の昔話である。この絵本は、欲をかきすぎると“労多くして得るものなし”となり、さらには「オトシアナ」に落ちるかもしれないことを教えている。以下、主なストーリーを見ていこう。

むかし、中国のある山里に住むランフーという若者が、月夜の晩に山へ草刈りに出かけている。背中に草がいっぱい入ったしよいカゴを背負って歩いていると、足もとの山道が光っている。よく見ると、金貨が道一面に並べられている。「なんだろう」と思っていたら、金貨の間から不思議なおばあさんが現われて、今夜は八月十五夜さまで、山の神様が金貨を月の光にさらす日であるという。そして、ランフーに「そなたは運よくそれに出会ったから、それをあげよう」といって、3 枚の金貨をくれる。

ランフーはまぶしく光る金貨をもらってほくほく顔で帰りかけたが、一面に輝く金貨を見るともう少しもらいたくなって、不思議なおばあさんのところにもどり、「うちはびんぼうで、こまっているから」といって、さらに3 枚もらう。その際に、「これだけあれば、おまえのうちでは たくさんのはずじゃ」といわれている。

大喜びで歩きだしてふとふりかえると、おばあさんの姿は見えなくなっている。そして、山から山へとたくさん金貨が月の光に照らされているのを見ると、ランフーはカゴいっぱいにもらわなかったことを後悔している。そこで、くると引き返し、背中のしよいカゴの草を捨てて金貨をすくい、ずっしりと詰めこんでいる。

家に帰る途中小川の石橋で一休みしているが、もっと大きなカゴならば、しよいカゴよりも 10 倍多く入るだろうと思い、金貨が入ったしよいカゴを橋の上から川へ投げ入れてしまう。身軽になったので、急いで家につけ

もどって大きなカゴ2つと天びん棒をひっかつぎ、山に向かっている。ところが、その途中「かみさんをつれてくるんだった」と思い直して再び家にもどり、寝ているおかみさんを起こして山へ一緒に急いでいる。石橋に来たところで、さらに、じさま、ばさまや、息子、娘、ブタ、コヤギ、ヒヨコまでも起こすことを考えてしまう。そして、家にもどって、家じゅうのものすべてを山に連れていくことになる。

けれども、先頭のランフーが金貨にあと一步となったとき、時がきて八月十五夜さまの月が山の向こうに落ちてしまう。すると金貨はまたたくまに消え、代わって真っ赤な太陽が昇ってくる。それとともにランフーの金貨は1枚もなくなり、がっかりした家じゅうのものは文句をいったり、不満をあらわして家路についている。

以上が、この絵本のストーリーである。一家の生活を支えるためにまじめに働き仕事をしていたランフーは、貧乏であった。その彼が働かずにお金を獲得できるチャンスにめぐり合ってしまう。仕事をしないでお金を得られるのは、いわゆる「不労所得」ということであり、現代ならば所有不動産・株式などの騰貴、親などからの財産分与や贈与の形態でイメージされる。

これらには幸運（運のよさ）も関与するが、この絵本の場合は「まったくの幸運」といってよい。つまり、不動産などの騰貴や財産分与は当事者がある程度発生を予測できるが、この絵本では幸運の発生をまったく予測できない、まさにビッグ・チャンスである。

問題は、不労所得を目の前にしたときに陥りやすい行動、筆者はそれを「不労所得のオトシアナ」と名づけたい。これはだれもが落ちそうなオトシアナであるが、ランフーのように日々まじめに働いているのに金銭的な報酬が少なく、経済的に豊かに生活していない人間が、このような「まったくの幸運」に直面すると落ちやすい。

ランフーはまず最初に、不思議なおばあさんから3枚の金貨をもらって

いる。このときの彼はほくほく顔になっており、この時点では大いに満足している。しかし、あたり一面に金貨がたくさんあるのを目にすると気が変わり、再びおばあさんのところに行って、追加の3枚をもらう。その際おばあさんは、これだけあればランフーの家族には十分であると伝える。まるでおばあさんはランフー一家のことを知っているかのようである。そして、ランフーは満足して家に帰ろうとする。

けれども、金貨の山を見るにつけ、“もっともっと”ほしいという願望が強くなる。そして、そのあとの彼は、金貨すべてが自分のもののように入れて歯どめがきかなくなり、金貨がほしいという願望は際限ないほどに拡大していく。

おばあさんが姿を消したこともあって、最終的には家族そして家畜まで総動員して山へ向かうが、無情にも到着と同時に夜が明けてしまい、金貨を獲得できる絶好のチャンスを失うことになる。

当然のことながら、動員されたのになんの報酬もなく徒労に終わってしまった家族からは、帰り道に「どこかの段階・局面」で満足して帰っていれば、金貨はゼロにならずに残ったのになどと、口ぐちに不満をいい立てられる。

家畜たちからは「しょいかゴを捨てなきゃよかったのにね」とまでいわれている。しょいかゴは、いうまでもないが、ランフーと一家が日々働くうえで必要な用具のひとつであり、これを捨てたことは一家にとっては大きな損失となる。ランフーは自分がしたことに頭をかかえる。

報酬のない徒労と仕事に必要な用具の喪失により、ランフー一家にはプラスよりもマイナスが発生している。くたびれ損の徒労は家族と家畜に不平、不満、不和などをもたらし、さらに、用具の喪失はすぐにも仕事の遂行を困難にして、経済的な損害を生み出すことになる。

とはいっても、あのときのランフーは行くところまで行かなければならなかった。いうなれば、これが「不労所得のオトシアナ」である。なにも得られないという最悪の結果になる前の「どこかの段階・局面」で引き返

せば、多くはないにしろ金貨は得られ、それは一家にとって十分であったはずである。

ランフーにはそれができなかったということである。いったんほしくなると欲求は際限なく拡大し、あくなきほどに得たいと思うようになっていく。金貨でいっぱいのお宝カゴさえ捨て、ついには奥さんをはじめ家族全員、さらに家畜まで動員して得ようとしている。

これは、だれもがひっかかりそうな残酷な「オトシアナ」であり、ランフーのように、日々まじめに働いているのに、金銭的な報酬が多くない人間がはまりそうである。たしかに、どこかの時点でやめておけばよかったのに、それができないのが人間である。ものごとを科学的に考える人なら、ランフーの「判断ミス」を指摘して、この問題の本質を明らかにするであろうが、欲求が際限なく拡大して、それをコントロールできない人間のありようを見ることができる。

「知足」という言葉がある。辞書によると、「みずからの分（ぶん）をわきまえて（分相応のところ）満足し、それ以上求めない」といった意味に解されている。ただし、「分」という言葉はやや古風な感じがするので、それを、「自分がおかれている状況や場」とであるとして、「それに見合うところ（内容やレベル）で満足し、それからほかに逸脱したものは求めない」という意味になる。

この知足という考えに立つとすれば、おばあさんがくれた6枚あたりまでが、ランフーの満足すべきもの、つまり、知足の内容やレベルであったであろう。おばあさんは6枚の金貨を与えたところで姿を消しているが、その際「これだけあれば、おまえのうちでは、たくさんのはずじゃ」といって、ランフーの知足を示している。したがって、ランフーがこの段階・局面で知足を感じれば、ランフー家はハッピーになっていたはずである。

しかしランフーは「オトシアナ」に落ちていく。人間は各種の欲求がなければ生きられない。つまり、欲求があるから働き、そして生きられる。ただし、「欲をかきすぎると、うまくいかない」ことが起きるのである。

つまり、知足の人間になることで、人間はハッピーになれることをこの絵本は教えている。

6 枚の金貨をもらったときまでがランフーの知足であった。それなのに、しょいかごを金貨でいっぱいにしたランフーが、金貨の重さもあって石橋でひと休みしたことで、オトシアナに落ちはじめる。すでになんかの重さに耐えていたはずであるが、ひと休みしたときに「大きなかつぎカゴを もってこよう。・・(中略)・・大きないえをたてて、きれいなきものをきて、人をたくさんつかって、うまいものを たべただけたべて…」と、その場で欲をふくらませている。

この欲が、自分の家の生活の改善をはるかに超えて大きくふくらむほどに、オトシアナに近づくことになる。山を降りてそのまま家に帰らずに、石橋でひと休みしたことが、一挙に知足を超えさせてしまったのである。

一般に、金貨、つまり金銭の獲得は、仕事を行ったり働く際の大きな動機づけである。働くことで得られる金銭は生活を支える原資になり、得られなければ生活は困難になる。この当たり前のことを再確認することが大切である。

まじめに働いて、それなりの報酬としてお金を得られれば“よし”であり、ひと安心である。しかし、まじめに働いても、それに見合うお金を得られないこともある。貧乏の多くはこれであり、ランフーはこの事例であろう。

別のいい方をすると、仕事をせずにお金が得られるという「まったくの幸運」はけっしてない。すでに述べたように、ある程度発生が予測できる「幸運」はたしかにあるが、それのない「まったくの幸運」はほぼありえない。

4. 感謝の心でごほうびをもらった『石のししのものがたり』の主人公

チベットの民話である『石のししのものがたり』(The Story of The Stone Lion) は、大塚勇三の再話、秋野亥左牟の画で、福音館書店から

1984 年に出版されている。秋野の絵はチベットの自然と人工物、そして登場人物の姿をダイナミックにいきいきと色あざやかに描いており、見る人の目をひきつける。のちに述べる、石のシシや主人公の兄などの表情はきわめて迫力あるものになっている。

主人公である弟が、お金を得るためにまじめに働き、偶然出会った石のシシを守り神としてお祈りをしていると、石のシシはそれに応えるようにごほうびをさずけ、弟はハッピーになる。それに対して、兄は欲ばりのためにオキユウをすえられるというお話である。以下が、この絵本の主なストーリーである。

むかしあるところに、大きな家に兄の家族と弟が暮らしていた。父親はすでに亡くなっているが、母親は同居している。家のことは兄がなにならにまで決めていた。兄は利口ものであるが、欲ばりで自分勝手な性格であった。一方、弟のほうは少しボンヤリしていたものの、やさしい気持ちの持ち主であった。

あるとき、兄は弟に「おまえみたいな まぬけは やしなっておけないから、どこにでもいってしまえ」といい、家から追いだしてしまう。しかたなく家を出ることになったが、気の毒に思った母親が同行してくれる。ふたりがあてもなく歩いていると、丘のふもとにだれも住んでいない小さな家が見つかり、そこで暮らすことにする。

翌日から弟はオノをもって丘にでかけ、木を切ってたきぎをつくり、それを背おって近くの町の市場で売ることにした。たきぎがうまく売れたので、弟はうれしくなり、家に帰って母親に、この仕事で暮らしていけると話している。こうして、親子はお金を得ながらつつましくも仲よく暮らしている。

ある日のこと、丘でたきぎをさがしていると、大きな石のシシの前に出る。この若者はそれがこの山の守り神で、家に住むことができたのも暮らしていけるのも、このシシのおかげにちがいないと思い、お礼をしなけれ

ばと考える。さっそく市場で得たお金でロウソク立てのうつわを買い、火をともしてお礼をいいながら丁寧にお祈りをしている。すると、シシが「おまえは だれだね。なにが のぞみかな」と話しかけてくる。弟は家を出てきた様子や、これからここで暮らしていきたいと返している。するとシシは「あしたのいまごろ 大きいおけをもって きてごらん」という。

翌日オケをもっていくと、シシはオケを私の口の下におけば金（キン）をはきだしてやるといい、そして、もしオケが金でいっぱいになったら、そうなったといえと指示し、金はたとえひとつでも地面にこぼしてはならないとつけ加えている。オケをおくと金が入ってくる。弟がいっぱいになったと伝え、流れはぴたりととまり、地面に落ちることはなかった。弟はおどろくとともにうれしくなり、シシにしっかりお礼をいうと、家に帰り母親に金を見せている。弟と母親はその金を使って大きな家を買ひ、また、ヤクやヒツジもたくさん買い入れて、楽しく暮らしはじめる。

ここまでが、絵本の前半部分である。後半は弟のウワサを聞いた兄とその一家が登場してくる。

兄一家が弟の家にやってくると、弟はあたたかくもてなしている。そして、金がどのようにして手に入ったかを話して聞かせる。兄は羨ましいやら悔しいやら、自分も金がほしくなってしまう。

町にでかけ、できるだけ大きなオケとロウソク立てのうつわを買い、石のシシのもとに行き、弟がしたようにお祈りをしている。すると、シシはややきびしい声で「おまえは だれだ。なにが のぞみなのか」という。自分はこの間金をどっさりもらった男の兄で、「わたしも きんを いただきたいのでございますよ」と答えている。

そこで、シシは同じように弟に教えたやり方を兄にも伝えている。シシの口から金が流れだしたが、兄はできるだけたくさんもらうことに気をとられ、オケが金でいっぱいになっても気づかず、オケからあふれでて地面

にこぼれたそのとたん、金の流れはとまってしまう。

そして、シシが「いちばんおおい きんのかたまりが のどにつかえた。くちのなかに てをいれて とりだしてくれ」というので手をさしこむと、シシはそのまま口を閉ざしてしまい、兄は手をひき抜こうとするが、どうやっても抜けなくなる。いくらシシに話しかけても、シシはなににも答えない。しかも、いつのまにかオケの金はただの石ころや土に変わっている。

夕方、兄の妻がやってきて、シシにお願いをしても、手はどうしても抜けないのである。そのときから、妻は毎日夫のところに食事を持って通うが、働き手がいなくなったために、家はどんどん貧乏になってしまう。そして、最後には食べるものもなくなってしまい、妻は「このくに おちちをのますのが やつとのことだわ」という。

これを聞いた兄は、自分もはらぺこなのでお乳がほしいといい、妻のおっぱいのほうに首を伸ばす。すると、シシは「はっはっは！」と大声で笑い、口があいた。このチャンスに、兄は大急ぎで口から手を抜いて逃げだしている。

以上が、後半の兄に関するものである。この種の話は絵本では多いのかもしれない。兄と弟は「人間のモデル」であり、人間像が明確に異なっていて、二項対立的になっている。つまり、兄がきわめて「利己的」であるのに対して、弟はそれほどではない。とはいえ、弟が利己的でないかという、決してそうではない。人間は自分の生活を支えるために収入を得なければならない、基本的にはだれもが利己的であり、そのレベルや内容にちがいがあるというだけである。

マネジメントの研究のなかに、マグレガー (D. McGregor) の X 理論、Y 理論という考え方があり、それがもてはやされたことがあった。賃金はほしいがあまり働きたくない X 理論の人間に対して、Y 理論の人間は、2. でも述べた生理的欲求や安全性の欲求、さらに、人間関係を大切にす

る社会的欲求などの上位にある、自我の欲求や自己実現の欲求を求めて仕事を行なうものとしてとらえられてきた。しかし、この考え方も極端に単純化された人間のモデルであり、現実の人間はいずれの傾向が強いかどうかにはすぎない。

弟も利己的であるが、兄は極度に利己的であり、弟とはちがいシシの問いに対して金がほしいとはっきり答えている。そして、シシのいいつけを守らないばかりか、口の中にある大きな金のかたまりがほしくて、それをも取りだそうとしている。兄は、とにかく金がほしいのである。シシはこの兄を見て怒りが頂点に達した状態になり、そのまま口をあけることなく、兄は手を抜くことができなくなる。

また、兄の利己性は金獲得への執着だけでなく、対人関係にも明確にあらわれている。弟に「おまえみたいな まぬけは やしなっておけない」といって、家から追いだしたことに示されている。それに対して、そのような扱いをうけたにもかかわらず、弟は訪ねてきた兄一家を歓迎している。兄はみやげらしいものも持参してこなかったが、弟はそんなことをまったく気にかけず、兄をあたたかく迎えている。

自分を家から追いだした実の兄はきわめて「排他的な」人間であるが、弟には兄を恨むようなところはなく、シシのことなど、これまでの自分のことを正直に伝えており、とても「友好的」である。ふたりのこのちがいは大きい。

そして、兄の話のなかで興味深いのは、仕事をせずに働かなくなると報酬が得られず、みるみる貧乏になっていくことである。これは当然の帰結である。シシが手を挟んだ口を閉じてしまい、兄は手を抜くことができない。働き手である兄が仕事ができなくなり、それが長期化したために貧乏になって、食べるのにも困る事態に直面する。

兄は大きな家に住んでいたが、仕事をしなくなるとたちまち貧乏になっている。別の見方を見ると、そういう現実があることを自覚しているからこそ、兄はできるだけ多くの金がほしくなり、結局 3. で述べたランフー

と同じように、「不労所得のオトシアナ」に落ちることになった。

もうひとつ興味深いのは、兄の解放の場面である。大人である兄が空腹のあまり、子どもがほしがる乳を自分もほしいと、妻の胸のほうに首をのばしたとたん、シシは「はっはっはっ！」と笑って思わず口をあけてしまい、これで兄は助かることになる。このとき、シシはもしかしたら、食べることでできなくなった兄一家のことを気にかけていたのではないだろうか。弟への場合と同じように、シシの対応は人間をよく観察して行われていたと考えられるからである。

シシから解放された兄は、弟の家に行くと、このような目にあったのは、自分が欲ばりで自分勝手であったからにちがいないと反省している。それを聞いた弟は、自分の金を兄に分けて生活できるようにしている。ここでも弟は思いやりがあり、兄に友好的である。

さて、主人公である弟の分析に進もう。兄に家を追いだされた弟はさぞかし大変であったであろう。やっとのことで、丘のふもとにある小さな無人の家を見つけ、幸運にも住まいをもてるようになって、「安全性の欲求」を満たしている。また、丘にある木でたきぎをつくり、町の市場で売るが、なんとか売れることでお金を得て、「生理的欲求」を充足させている。

そして、この仕事が順調につづくことで、生活を維持する「自信」をもつようになっていく。しっかりした体力とスキルがなければ、たきぎをつくり運ぶことはできない。また、市場で売る仕事は簡単なようでむずかしい。

元来利口とはいえず、少しボンヤリしていると見られていた弟にとって、仕事で得たこの自信は生きるうえで大きな力になったであろう。当然のことながら、この自信は仕事へのさらなる動機づけになったと思われる。彼のその後の仕事について絵本はなにもかいていないが、まじめに働いているので、たとえ石のシシからのごほうびがなくても、おそらく成功を収めたであろうと推察している。

このように、住まいをもって雨風にあたることなく、夜も不安なく過ご

せるようになり、また、たきぎを売る仕事で収入を得て、食料などを確保している。さらに、収入の確保により仕事に対する自信が生まれ、それによってこれまで以上に生活の安定が得られることになった。

仕事への自信とともに重要と思われるのが、主人公の「感謝の心」である。家に住むことができたのも、収入を得て暮らしていけるのも、それは石のシシのおかげだと思い、ただただ感謝の心をもって祈りをささげている。

この感謝の心、そして信心の気持ちを示したことに対して、シシは“ごほうび”を主人公に与える。あすオケをもってこいといわれたが、格別になにかを期待したとは思えない。すでにシシからは住まいと仕事をもらっていると考えており、その返礼として祈りをささげていたからである。

とはいえ、金をもらって弟はうれしくなり喜んでいる。それとともにおどろきの気持ちもある。そして、もらったことに対して深く感謝している。金を得て、彼は3階だての家を建てるとともに、たくさんの家畜を買っている。この消費行動は、そのときの暮らしを改善しようとするものとして容易に了解できる。

家畜をたくさん手に入れたとすれば、たきぎづくりの仕事はやめてしまったかもしれない。そして、なにかのリスクに備えて、すべての金を使うことなく貯えていたものと思われる。すでに述べたが、助かった兄をその後経済的に支援しており、それはこの貯えから提供されたのであろう。

ここで問題にしたいのは、シシからの“ごほうび”をどのように考えた方がいいのかということである。主人公は大きなオケをもってくるようにいわれたが、なにをもらえるかもわからなかったし、金がもらえると期待していたとも思えない。

したがって、このときの彼にとってごほうびは、3.で述べた、発生の予測ができない不労所得である「まったくの幸運」が舞いこんできたことになる。しかし、これを「まったくの幸運」と理解してよいのであろうか。シシは、まじめに働いて生活をしているだけでなく、感謝や信心の心のある主人公に、「リターン(報酬)」を与えようと考えたと見るのが妥当である。

それに対して、兄はひたすら金だけがほしいとできるだけ大きなオケを用意し、シシがオケがいっぱいになったと指示してもそれに応じず、そのうえ、のどにつかえた大きな金のかたまりをとってほしいといわれると、その誘いにやすやすと乗ってしまう。このような兄を見て、シシは口を閉ざす行動をとっている。このときの兄にとっては「不労所得」を得るチャンスであったが、その「オトシアナ」に落ちてしまい、最後は命からがら逃げ帰っている。

要するに、シシがこらしめたい兄とはちがい、弟はむしろ応援すべき存在であった。“ごほうび”にしては多めのリターンであったかもしれないが、シシは彼を3.で述べた「知足」をわきまえた人間と見ていたのであろう。彼が浪費をしたり物見遊山にふけるとは考えていなかったのである。

もうひとつ、周辺の人びととの関係に注目したい。主人公は、シシからギフトをもらわなかったとしても、彼の周辺にいる人びとからの信用を得て、彼らからリターンをもらうであろう、と筆者はどうしても推察してしまう。彼のようにまじめに働き、感謝の心と信心をもっている人間は、おそらく周辺の他者からも評価され、サポートされるものであると考えている。

主人公は兄に家を追いだされ、食べるだけでなく、住むことさえも困難になっていた。旅にでて、未知の地でやっと見つけた家と仕事で、彼は懸命にがんばっている。彼は「生理的欲求」や「安全性の欲求」が満たされるかどうかというきびしい環境のなかで働き、お金を得ている。

そして、そのまじめな働きぶりや感謝の心がシシや周辺の人びとによって評価されている。金をもらったあとは、以前に比べてはるかに豊かな生活が送れるようになっていたが、そのようななかでも、彼は自分の知足を忘れていなかったと見るべきである。

5. 女房が金の価値を教えた『炭焼長者』

『炭焼長者』（再話・稲田和子、絵・太田大八、童話館出版、2008 年）は、金（キン）や貨幣としての小判の価値を知らなかった炭焼き男が、女房となる女性からそれを教わり、長者になった話である。この話の発端には、人間の出生をサポートしたり、見守ったりする神様たちが存在していて、その神様たちは出生する子どもの運命や寿命を占っていることが書かれている。

千石屋という長者が仕事の帰り道、夜になって木の下で眠っていると、夢のなかで 3 人の神さま（ソバ、ミソ、アワ）たちに会い、かれらから、まもなく生まれる自分の男の子が「青竹三本」、そして、隣の小作人の女の子は「塩一升」であることを聞いて、家に帰っている。この部分は今回の議論と関係ないので省略するが、予告どおり、話の後半で、長者の息子と隣の小作人の娘が結婚するもののうまくいなくなり、家を出た女性はまずしい炭焼き男と再婚して、最後には彼を長者にする。一方、長者の息子のほうは落ちぶれてしまい、ザルやカゴを売る仕事をするという話である。

太田は山陰地方のこの昔話を、色彩豊かで臨場感のある絵で描いており、登場する神様や人間は個性的に表現されている。貧富の差が大きい時代であり、炭焼き男が住むほったて小屋と、彼が長者になってから暮らすお屋敷との格差はあまりにも大きい。

それでは、後半部分のストーリーを見ていこう。

「青竹三本」の運の意味はわからなかったものの、隣の小作人の娘の運が「塩一升」で、たいした福運であることを覚えていた千石屋は、息子が 18 歳になったときに、その娘と結婚させている。再話者の稲田の解説によると、神様がいう「青竹三本」とは、1 日に青竹を 3 本切ってザルやカゴをつくり、それを売ってやっと生活できる人間になり、「塩一升」とは、

当時貴重品であった塩を1日に1升も使うような長者・お金持ちになるというのである。

ふたりが結婚したものの、息子はこの娘が貧乏育ちというだけでどうにも気に入らない。娘は毎日よく働くいい女房であったが、息子は遊ぶだけでまともに仕事をしなかったので、みるみる貧乏になっていく。

ある年の夏に、女房がそばもちをつくって昼飯にだしたところ、男は「こんなものが食えるか」とお膳をけとばす。すると女房は、食べ物で足のような人のところにはいられないといって、家をでる支度をする。それにあわせて、ソバ蔵にいたソバの神さまも、こんな家にはいられないといって蔵をでていく。これを見たミソ蔵、アワ蔵の神さまも青竹三本の息子にあきれて、この家をでていく。そして、3人の神さまとともに、3つの蔵にあったなにもかもが、チョンチョ（この地方のガ）になってなくなってしまう。

女房はふろしきづつみひとつを手にかかると、チョンチョの群れを追いつつながら歩いていった。山道に入って疲れたとき、一軒のほったて小屋があったので、なかに入ってひと休みしている。そのうちに、炭俵を背負った男・五郎左衛門が帰ってくる。女は、自分は難儀しており、今晚泊めてくれるように頭をさげて頼んでいる。そして、ソバの神様からあなたの名前を聞いているともいう。

男は「食べる米も、ふとんもねえが、とまるだけなら、とめてやる」といって、アワのかゆをたいてすすめ、ワラをかけて寝させている。翌朝になると、女は帯のあいだから小判を1枚だして、米を買ってきてほしいという。男は米を買いに山をおりるが、途中で池にカモが遊んでいるのを見て、「あれを仕とめて、女に食わしてやろう」と思い、小判をカモめがけて投げるがうまくいかず、池に落ちてしまう。そして、なにももたずに帰っている。

女はこの話を聞いてあきれるとともに、くやしがあった。すると男は、「あげに光るもんなら、炭焼き窯のまわりに、なんぼうでもあるわ」という。そこで、女は自分をそこへ連れていくように頼み、ふたりして行くと、金

のかたまりが光って土からのぞいている。ふたりはそれを炭俵に入れて、家にもどっている。

そののち、女は男の女房となり、金を掘りだしてはお金に替えたので、金持ちになっている。ふたりは里へおりて大きな屋敷をかまえ、蔵をつぎつぎに建て、大勢の人を雇って、たいそうな長者になっている。

ある日、この屋敷にみすばらしい身なりの、1 日に青竹 3 本を切ってつくったザルなどを売る男がやってくる。自分のもとの夫であることがわかった女は、持っていたザルなどをすべて買い、ついでにみやげとして、小判 5 枚をひそかに入れたタクアン 5 本のつつみを男に渡している。男は屋敷をでると、つつみの中身を確かめることなく、「落ちぶれたからというて、あわれみはうけん」といって、そのまま川に投げすてている。

以上が、この絵本の主なストーリーである。千石屋の長者は、小作人の娘の福運を聞いて息子と結婚させたが、しばらくして働き者の女房は、仕事きがきらいなうえに自分を気に入らない息子の家を出ていく。これを見た屋敷内に住む神様たちも一緒に出ていき、たちまち家からは福が消えていく。これにより、千石屋はさらに落ちぶれて、息子は青竹三本の男になってしまう。もし女房を大切にしていれば、おそらく千石屋の繁栄は続いたであろう。

女はチョンチョの群れとソバの神様に導かれてほったて小屋に到着し、そこで炭焼きの男と出会う。家は粗末で、食べるものもふとんもない貧しい男であったが、精一杯のもてなしを行っている。女は長者の家をでるとき、ふろしきづつみひとつしか持っていなかったが、帯には小判を入れていた。そのなかの 1 枚を男に渡して米を買うように頼んでいるが、小判の価値を知らない男はカモをめがけて投げてしまう。

男にとって小判は単なる石にすぎなかった。女が投げた理由を問うと、あのようなもの（金）なら炭焼き窯の周辺にたくさんあるというて、女をその場所へ連れていく。その後、ふたりは夫婦になり、金を掘って小判に

替え、長者になる。

この男は小判の価値をまったく知らなかった。知っていればうまく活かし、豊かな生活を送ることができたはずである。しかし、実際には懸命に働いてはいるものの、きわめて貧しい暮らしをしている。

極貧の炭焼きには、貨幣経済は無縁であったのであろう。生活に必要なものは自己調達するか、他者との物々交換によって獲得していたと見るべきである。そして、小判はそれまでに見たことがなく、石ころと同じであった。

それに対して、塩一升の女は小作人の娘であるので、貧乏であったことは炭焼き男と同じである。つまり、お金に縁はなかった。しかし、彼女は長者の嫁になることで、お金の価値を知ることとなる。また、働き者の彼女は、仕事がきらいな夫との生活のなかで、お金やモノ、とくに食べ物を大切にしないと、貧乏になることを経験している。この経験はその後の彼女にとって貴重であった。

炭焼き男に米を買ってくるように頼んだときの小判は、本当に困ったときに使おうと考えて、長者の家をでるときに持ちだしたものであろう。帯のなかにどれほどの小判をひそませていたかは不明であるが、それは、家をでる前から計画的に貯えていたものと思われる。したがって、男が小判をカモに投げつけたことを知ってあきれるとともに、悔しがるが、それは当然のことである。

炭焼き窯の周辺に金があることがわかり、女は男にその価値を教えて長者にしていく。自分の周囲に有益な資源があっても、それをチャンスに変えることができない人間は多い。炭焼き男もそのひとりであるが、活用することによって大きな屋敷をもつことができたのである。つまり、まじめに働くだけでは豊かにならないことも、この絵本は教えている。

炭焼長者の女房となった女は、話の終りのところで青竹三本の男と再会している。そして、男が持参していた商品をすべて買いあげるとともに、みやげに小判を入れたタクアンの包みを渡している。どのような思いで

あったかは不明であるが、男に対して同情の感情をもっていたことは確かである。しかし、男は落ちぶれたからといって同情されたくないといって、みやげを川に捨てている。

当然のことながら、これで男は青竹三本の男をつづけなければならない。つつみを開けて塩一升の女の福運にあずかろうとしていれば、その後の人生はもしかしたらちがっていたかもしれない。中身を確かめなかったために、そのとき彼が得たものはザルやカゴのわずかな売上げだけであった。また、もしも男がみやげを川に投げ捨てたことを女が知ったとしたら、カモに小判を投げた炭焼き男のときと同じように、あきれて悔しがったことであろう。

さて、この絵本は人びとが貧しく暮らす時代をとり扱っている。仕事は小作人と炭焼きがでてくるが、ふたつともまじめに働いても暮らしは貧しい。しかし、同時に長者が登場している。ひとりは長者であったものが落ちぶれ、もうひとりは貧しかったものが長者になっている。つまり、この絵本は貧しい人びとと長者が存在する「格差社会」を描いている。

そのなかで、長者であってもいつまでもそのままであるのではなく、遊ぶのが好きであったり、あまり働かなかったり、お金や食べ物を大切にしなければ、貧しくなっていく。しかし逆に、貧しくてもチャンスを活かせば長者になれる。つまり、長者も貧しい人もいつまでも同じ状態ではないこと、また一方から他方に変わるという、ふたつの可能性があることを示している。

小作人の生活については描かれていないが、炭焼き男の暮らしぶりはきわめてきびしい。懸命に働いているが、住まいはいまにも壊れそうであり、家具はなく、ふとんもない。そして、食べる米もない困窮した生活である。そこでは、「安全性の欲求」も「生理的欲求」も満たされていない。炭焼きの仕事をしてやっとのことで生きている。

それに対して、新たに長者になった男は金によってこれらの欲求を満たしたうえに、大勢の人を雇って、それらの人びとの生活を支えるようにも

なっている。この絵本の場合、周辺に金というきわめて有力な資源があって、それを活かして豊かになっているが、金でなくても、うまく活用できるものがあれば、これまでの状態を変えられると考えられる。チャンスは多くはないが、それを活かすという考え方が、現実の仕事の選択と実施には必要なのである。

6. 社会的な上昇志向が見られる『いっすんぼうし』

『ももたろう』、『うらしまたろう』などとならんで、日本の著名な昔話に『いっすんぼうし』（文・石井桃子、絵・秋野不矩、福音館書店、1965年）がある。ストーリーはだれもおおよそ知っているであろうか。秋野の絵はあたたかく、華やかさもあり、そしてかわいく描かれている。この昔話の絵本には種々あるが、絵がすばらしいので選んでみた。

小澤俊夫・再話、赤羽末吉・画の『日本の昔話1』（福音館書店、1995年、28－36頁）にも、58篇中のひとつとして収録されており、ストーリーとそれを支える考証などはしっかりしている。しかし、この本は絵本ではなく、読み物である。また、文・大川悦生、絵・遠藤てるよの『いっすんぼうし』（ポプラ社、1970年）も見たが、調査が行き届いており、福岡県地方に伝わっていた話をヒントにして書かれている。絵は素朴で、いかにも昔話の感じを与えている。ストーリーは石井のものに近いといえる。

このなかから、主なストーリーを「石井」版で述べていこう。

むかし、あるところに暮らすおじいさんとおばあさんには子どもがなく、さびしく思っていた。毎日お天道様にお祈りをして、「てのゆびほどのちいさいこどもでもひとりあったら」とお願いしている。すると、願いがかなって親指ぐらいの男の子が生まれ、“いっすんぼうし”と名をつけてかわいがって育てている。

しかし、12、13 歳になっても小さくて、家の手伝いはできず、おじいさんとおばあさんはがっかりするし、村の子どもたちは「ちび ちび」といって馬鹿にする。そこで、いっすんぼうしは「わたしは みやこにのぼって ひととはたき してこようと おもいます」といいだす。おじいさんとおばあさんは悲しがるが、願いを許している。彼はお椀を傘に、箸を杖に、針を刀に、麦わらをさやにして旅立っていく。

しばらく歩いたあとに川があつてので、お椀を浮かべ、箸をかいにして、川上をめざして上っている。何日かたつて、都に到着するが、小さな彼にとって、都への旅程はきわめて困難であつたろうと推察される。

都は人が多く、人通りの少ないほうに行くと、大きなお屋敷の前ででている。いっすんぼうしはこのお屋敷ならば、自分にできる仕事があるにちがいないと思い、「おたのみ もうす」と声をはりあげてチャレンジする。

小さいので、はじめは気づかれなかったが、なにができるかと問われ、針の刀で飛んでいるハエを刺したり、扇の上で舞を舞うなどのスキルを見せて、お屋敷中の拍手をもらっている。これにより、都で名高い大臣のこのお屋敷で働くことになる。

彼は屋敷の人びとにかわいがられるが、なかでも大臣のお姫さまの好感を得ている。お姫さまが手習いをするときに紙を押さえるのも、すごろくをするときさいころをそろえるのも、いっすんぼうしの仕事であつた。

まめまめしく働くうちに何年か経ち、ある日お姫さまのお伴で清水寺にお参りにでかけている。帰り道でさびしいところにさしかかったとき鬼があらわれ、お姫さまをさらおうとする。ここで、彼の活躍がはじまる。青鬼、黒鬼の目を針でチクリザクリ、最後に赤鬼の口に飛びこんで口のなかを刺すので、鬼たちは降参し、もっていた“うちのコヅチ”を投げ捨てて逃げてしまう。

いっすんぼうしがなんでも望みをかなえることができるこのコヅチをお姫さまに見せると、姫は、戦いを勝ちとったいっすんぼうしの望みをかなえましようという。「わたくしの のぞみは、わたくしのからだが 大き

くなること」というと、お姫さまはすぐさまコヅチをなん度か彼に向かって振っている。すると彼は背丈が伸び立派な若者に変っていく。

いっすんぼうしの手柄はまもなく都中に知れわたることになる。その後「しゅっせして、やがて、ひめをはなよめにむかえ、おじいさん おばあさんも よびよせて、しあわせに、くらししました」という。

よく知られた話である。しかし、3冊の本をこまかく見ると、再話者によって、いくぶんのちがいがある。まず「石井」版では、お天道さまに子どもがほしいと願って、その家に子どもが生まれるが、「小澤」版によると、神さまに願かけをして神社に参拝している。神さまは夢のなかで、子どもはさずけられないが、神社の鳥居のそばに小さな子どもが待っていると告げられ、その子を連れて帰っている。したがって、その子は「神さまからのさずかり子」であるという。また、「大川」版では、神社なのか自宅なのかは不明であるが、燈明（とうみょう）を朝に晩にあげて祈っており、その結果、「石井」版と同じく子どもが生まれる。

つぎに、都にでて仕事を行う目的や動機については、「石井」版で家の手伝いができないうえに、村の子どもたちに馬鹿にされるので、都へ行行って「ひとはたらき してこよう」と思っていると述べているが、「小澤」版では、「こう、いつまでも貧乏なものこまったものだ。ひとつ、おれが都へでて、かせいでこようと思う」とされている。このふたつの版は、貧しい生活をなんとかするために都に出稼ぎしようといっている。しかし、「小澤」版の「神さまからのさずかり子」にいじめられた様子はない。

「大川」版では子どもたちにいじめられており、「ひろい よのなかへでてみとう なりました」といい、おじいさんとおばあさんを驚かせている。そして、この絵本の解説で再話者は、いじめられたことがエネルギーになっているとも述べている。つまり、ここでは「自己の成長」への志向性が前面にだされている。

第3は、都へでるための旅程に関することである。いっすんぼうしには、

とてつもなくきわめてきびしい挑戦であったにちがいないが、3つともそれほど大変だとは書かれていない。「小澤」版では、越後、つまり現在の新潟県が彼の出身地になっているので、都への旅は途方もない旅であったはずである。

まず「石井」版では、徒歩と川を上るのに難儀したぐらいのことしか書かれていない。そして、「小澤」版では、川を上ったあと、街道にでて、馬方に「おれをその馬の耳にちょっとのせて、都につれていってくれ」と頼んでいる。「背にのったら銭（ぜに）をとられるが、耳なら、銭はいらないだろう」と説得している。結構、合理的な考え方で、苦勞した感じはあまりない。

それに対して、「大川」版はほぼ「石井」版と同じ行程であるが、道に迷ったときにアリが教えてくれたり、川で難儀したときに、チョウやミツバチが行路を導いてくれている。それは、広い世界にでて成長しようとする人間にとって大きな支えになっている。

第4は、旅の終着地をどのように考えていたかということである。「石井」版では、人通りの少ないほうに行くと、大きなお屋敷の前に行き着いたという。事前に目的地が明らかにされている感じはない。

それに対して、「小澤」版は都に着くと、「ここらでいちばんえらいおかたは、どなたですか」と、道を歩く人にたずね、三条大通りの大臣のお屋敷であるとの回答を得ている。同じように「大川」版では、主人公は「みやこへ きたら、いちばん えらい 人のところへ いく」と思っており、やはり社会的地位の高い人の家に向おうとしていることが明示されている。

第5に、“いちばん えらい 人”の屋敷で、主にお姫さまの生活のサポート的な仕事を行う「石井」版についてはすでに述べたとおりであるが、「小澤」版は、なにごとにも気がきいて賢かったので、気に入られたとだけ書かれている。

ただし、「大川」版では、お姫さまの手のうえで、自分は修業のために

都にきたとはっきり述べている。その言葉に対して、お姫さまは、読み書きの学習だけでなく、社会的な地位の高い人に必須の舞いや鼓などの教養を高めることを求めている。

最後に、もうひとつ明らかにしておきたいのは、鬼退治が終ったあとのことである。「石井」版は前述のとおりであるが、「小澤」版では、お姫さまが落ちていたうちでのコヅチを発見して、いっすんぼうしの頭をたたいたら背が伸びただけ述べている。お屋敷にもどった彼は、自分が「神さまからのさずかり子である」ことを大臣に話したり、鬼退治の場面を詳細に説明している。

「大川」版では、お姫さまがいっすんぼうしになにがほしいかと問うと、「お金も、お米もいらぬ、背が欲しい」と答え、姫がコヅチをふると立派な若者に変っている。このことから、「小澤」版では、自分の出生を重視し、「大川」版においては、お金やお米を得ることよりも、「石井」版と同じように、自分の小さな身体を大きくすることを大切にしていることがわかる。

以上のように、「いっすんぼうし」といっても、全体のストーリーはほぼ同じであるとしても、細部では再話者によってかなりちがった内容になっている。しかし、当時の都である京都で仕事をさがすという点では3冊とも同じである。この点では、働く場を求めて地方から東京などの大都市に向かった、明治以降の日本人とオーバーラップするところがある。

都でそれなりに仕事を行って報酬が得られれば、食べることや住まうことに困らなくなり、「生理的欲求」や「安全性の欲求」は満たされるのである。そして、報酬が得られたのちは、いつか自分の郷里に帰ることも想定されている。

この絵本でも、貧しさを脱出することが仕事の最大の動機づけである。ただし、どうしても気になるのは「大川」版において、広い社会にでて、そこで自己成長を遂げようという志向性が見られることを、どのように理解すべきなのか。

いっすんぼうしが生きた時代には、多くの人びとはかなり狭い閉鎖的な

地域で生まれて死んでいったと考えられるが、そのなかできわめて小さな体の彼が都に広い社会を見て上京を企てることは、とてつもない「挑戦」であり、「野心」であるといってよい。それは、単なる報酬を得るための「出稼ぎ型」労働とは異なっている。したがって、いっすんぼうしの場合、貧しさからの脱出よりも、広い社会を経験して自己成長をはかるほうに力点がおかれていたのではないかと見られる。

要するに、根底に貧しさからの脱出の動機はあるが、広い社会における経験がもうひとつの動機となり、このふたつの要素が並存しているとみるべきである。豊かさを求めるだけの脱出が目的であるならば、都に行かなくても、報酬は多くはないが、比較的安全な別の代替案（仕事）をさがしたかもしれない。いっすんぼうしの都行きは“ハイリスク・ハイリターン”の選択であり、“ローリスク・ローリターン”の選択をしていない。ここには、広い社会で得られるであろう経験を重視する考えが強く反映していたと考えたい。

そして、この経験をどのように獲得するかで彼が選んだのが、都の大臣の家で働くことであった。いうまでもないが、大臣は経済的な富だけでなく、政治的な権力をもつ少数の特権的な階層の人間であるので、そのお屋敷で勤務することは、参入のむずかしいハードルの高い障壁であるが、貧しさを脱出する方法としてきわめて有効なものであった。つまり、お屋敷づとめはだれもが容易にできることではなかったが、いっすんぼうしはそれを実現し、貧しさから脱出する。

さらに、お姫さまとの結婚により、彼は大臣ファミリーの一員となり、特権的な階層の人間となる。それは、彼の社会的な地位（ステイタス）の上昇と維持に役立ち、いっすんぼうしは貧しさをまったく感じさせない階層の人間に転化している。都へ旅立つときには、成功したのちに郷里に帰ることも考えていたが、社会的な地位を獲得することでUターンすることもなくなり、むしろおじいさんとおばあさんを都に引き寄せている。

このように、いっすんぼうしの行動には、貧しさから逃がれ、広い社会

を経験したいという思いが強かったとしても、もうひとつ、社会的な地位を得ようとする「社会的な上昇志向」が少なからずあるのではないかと、どうしても感じてしまう。「石井」版では鬼退治のあと、彼は「しゅっせ(出世)して」とある。広い社会にでて仕事を行い、活躍して社会的な地位を獲得する。この動機がどれほど強かったかは必ずしも定かではないが、彼が選択した行動には、明らかに社会的な上昇志向が見られている。そして、これによって、同時に貧しさからも脱出している。

貧しい時代にも支配者・権力者といった階層の人びとや、長者といった金持ちは存在し、かれらは貧しさとは無縁な人びとであるが、いっすんぼうしは大臣のお屋敷づとめを通じて、貧しさとは無縁の人間に転化している。

7. 総括的な検討

以上、5冊の絵本を見てきた。おわりに、いくつかの論点を明らかにしていこう。

(1) ワーク・モチベーションのコア (中核)

5冊の絵本の世界の基調は豊かさではなく、食べるにもこと欠くという貧しさ(貧困)である。したがって、仕事を行う場合、欲求理論のなかでは「生理的欲求」や「安全性の欲求」の充足が重要になってくるのは当然のことである。

『くった のんだ わらった』のオオカミは食べることを大切に行っているが、これは、今回対象となった人間についても同じである。森の強者と思われるオオカミでさえ、飲み食いにも苦労していたようであるが、食べ物や飲み物がなければ生きていくことはできない。だからそれを

得るべく、ヒバリの依頼に応じて働くことになった。そして、オオカミにモグラの追いだしを頼んだヒバリには、モグラによって家が壊されそうで子育てに不安が生じ、それを取り除く安全性への強い欲求があった。

この絵本はヒバリとともにオオカミという動物が主人公であるが、『山いっぱいのかんか』、『石のししのものがたり』、『炭焼長者』、『いっすんぼうし』の4冊は人間が対象になっている。オオカミにとって金貨、金(キン)、小判などはまったく意味がなく、食べ物やビールといった現物が報酬である。人間が主人公である場合でも、貧しさがきびしいと、金や貨幣よりも現物のほうが重視されている。その典型は、長者になる前の炭焼き男に見ることができる。

金や貨幣についてはのちに議論するが、貧しさが基調である状況のなかで、生存や安全を維持するためにまぎれもなく働く姿、働こうとする姿勢が残りの4冊にも共通して見られる。落ちぶれた青竹三本の男でさえ、ザルやカゴを売ってあるいている。

現代のような職業や仕事を自由に選択できる余地は極端に少なく、多くが自分の親が行ってきたことを継承し、実施することが多かった。また、「自我の欲求」や「自己実現の欲求」といった高次の欲求よりも、低次の「生理的欲求」や「安全性の欲求」の充足が動機づけのコア(中核)であった。これは人間の長い歴史のなかでは、ごく一般的なことである。

これらの欲求以外に興味深いのは、ひとつには“心の満足”の重要性がある。オオカミは“くった のんだ”のあと、“わらった”を求めている。食べたり、飲んだりすることは基本であるが、それと同時に、大いに笑いとばして心が満足することも大切になっているということである。

これに関連して、この絵本で、結婚式のお祝いのパーティが行われて食べたり飲んだりしているが、参加者はみな互いに楽しく話し、笑いあっている。ここにも心の満足があったと思われる。かれらはパーティの途中で幸せの鳥であるヒバリを追いかけてしまうが、そのなかで全員が交流し、コミュニケーションをとりあうことで、人間関係を良好にし、深めている。

これは、人間関係を大切にしようとする「社会性の欲求」の意味を認識させてくれる。

もうひとつは、『いっすんぼうし』における「自己成長の欲求」の強さである。これはすでに述べた「大川」版で重視されており、周囲の子どもたちに“イジメラレテイル”ことをバネにして、広い社会を経験したいと思うようになったとしている。

ただし、見方によれば、都の特権的な地位の人間のもとで働いて、みずからもその地位を実現しようとしているために、社会的な上昇志向が強く、悪い方をする、「立身出世主義」と批判をうけるかもしれないが、貧しさから逃がれ、広い社会を経験して自己成長するには、これが一番の近道であると考えたにちがいない。彼の生きた時代には、いろいろ選択できる代替案があったとは思えないので、きわめて合理的な選択であったといえる。

意識しようとしまいと、人間には自己成長の欲求があるであろう。「大川」版のいっすんぼうしはこの欲求を強くもち、さらにその具体化の方法をも明確にして実現にむかって突き進んでおり、意志の強さが示されている。そして、それは、『石のししのものがたり』の弟や『炭焼長者』の女房に、貧しさを脱出する努力や工夫は見られるものの、自己成長の欲求がそれほど感じられないのと好対照をなしており、現代を生きる人びとの仕事・キャリア観に近いのかもしれない。

(2) 仕事と金や貨幣などの金銭的報酬

仕事をして、報酬としてそれに見合う金や貨幣を獲得できれば、それによって人間の基本的な欲求を満たすことができるので、望ましい状態である(A型)。石のシシの弟がこのこれにあてはまる。

また、仕事しても報酬が少なければ貧しい状態であり、豊かになることはできない(B型)。『やまいっぱいのきんか』のランフーは、昼間だけ

でなく夜も働いているが貧しく、また、青竹三本の男や長者になる前の炭焼き男も B 型である。つまり、これは働いても金や貨幣は得られると必ずしも考えることができない状態にある。

そして、働かなければ報酬は得られない（C 型）。これは自明なことである。『石のししのものがたり』の兄は、手をシシにとられて働けなくなってしまったので、報酬を得られずに貧乏になっている。弟とちがって財産をもっていたが、働かなくなるとたちまち貧しくなる。青竹三本の男も、千石屋の息子であったときから働くのがきらいで、働かなかったのが貧しくなっている。

さらに、もうひとつは、働かなくても金や貨幣が得られる不労所得の場合である（D 型）。ランフーや『石のししのものがたり』の兄が、この典型である。もっとも、このふたりは不労所得を得られそうであったが、最終的には獲得することができなかったばかりか、なにもかも失う羽目になる。

不労所得のような「まったくの幸運」は、現実の世界ではほぼありえないが、お話の世界ではしばしば見られる。有名なのはアラビアン・ナイトの『アリババと四十人のとうぞく』（文・山口俊子、絵・原ゆたか、講談社、1986 年）である。「ひらけー、ゴマ」ととなえると洞窟の岩の戸があいて、宝物（金貨）を手にした貧乏なアリババがいる。しかし、金持ちの兄は宝物に夢中になったため、おまじないの言葉を忘れて、盗賊たちに殺されてしまう。

また、中国の昔話『鳳凰と黄金のカボチャ』（文・崔 岩峯、画・楊 永青、訳・片桐 園、岩崎書店、1990 年）でも、貧しくも正直ものの弟が鳳凰からもらった大きなカボチャを切ると、黄金の種がでてきて、彼は周囲の人びとにその種を分ける。一方、立派な屋敷と財産をもつ兄のほうは金の山に夢中になってしまい、結局のところ太陽の熱で焼け死んでいる。

『アリババ』と『黄金のカボチャ』は、文脈的に『石のししのものがたり』とかなり共通しており、いずれもきわめて対照的な兄弟が登場してい

る。そして、強欲の兄は金や貨幣の獲得に失敗している。

ところで、この3つの話の弟たちは、働かずに報酬を得るという「まったくの幸運」にめぐりあったのであろうか。『石のししのものがたり』の弟については、懸命に働き、信心の心をもっていることをシシだけでなく周囲の人びとが評価し、その結果として報酬をうけた(A型)ので、これはまったくの幸運とはいえない。

これと同じなのが『黄金のカボチャ』の弟である。『石のししのものがたり』の弟と同じように、兄に家を追いだされた弟は、兄が追い払った小鳥——実は鳳凰——の傷を熱心に手当し、小鳥が落していったカボチャの種を大切に育てる。

のちに鳳凰が住む山で鳳凰に出会った弟は、黄金をほしただけのもっていったいいといわれるが、カボチャの種だけをもらって帰る。そして、大きくなったカボチャから黄金の種がでてくる。この黄金の種は、小鳥の傷の手当をし、カボチャを大切に育てた弟の心根と行動に対する報酬(A型)であることは明らかであり、これも「まったくの幸運」と考えることはできない。

それに対して、盗賊の宝物を得たアリババの場合は「まったくの幸運」(D型)といえる。ただし、欲ばりの兄を失っただけでなく、自分も盗賊に命を狙われるという危険に直面している。そして、もし家の賢い召使いの女性がいなければ、アリババの命運はつきていたであろう。このように、まったくの幸運には、きわめてきびしいリスクがつきまといっている。

(3) 「不労所得のオトシアナ」から逃れるための「知足」

金や貨幣の価値をまったく知らず、それをほしい気持ちがない炭焼き男の事例もあるが、そのほかの場合はほしいと考えている。なかでも、まじめに働いても報酬が少ないB型の人間は、金や貨幣を得たい、増やしたいという欲求は強い。したがって、そのような人間にとって、働かなくて

も報酬が得られるならば、それに心を奪われてしまうのは、いたしかたないことであろう。

問題なのは、金や貨幣への欲求のレベルが際限なく上昇し、増加してしまうことである。『やまいっぱいのきんか』のランフー、『石のししのものがたり』の兄、アリババの兄、『黄金のカボチャ』の兄がいずれもそういう気持ちとなり、その結果、なにも得られないだけでなく、ひどい場合には命さえも失うような悲惨な事態になってしまう。

さて、この状態から逃れるためには、『やまいっぱいのきんか』のランフーのところで述べた「知足」が大切である。自分の状況をはるかに超えた内容やレベルにまで欲求をもたずに、自分の現状とほぼ一致したところで満足することである。『石のししのものがたり』の弟は、現状の仕事と報酬で満足していたので、金をもらうことを期待していたと考えることはできない。また、『黄金のカボチャ』の弟は、黄金をほしただけもち帰ることをすすめられてもそれを断り、他の人のために使ってほしいとまでいっている。

しかし、実際には知足の実行はむずかしい。金や貨幣を得たいという欲求は、その人間の利己心であり、コントロール（制御）がむずかしい本能的なものである。それができるのは、なにを大切に、人間としてどう生きるかという「価値観としての知足」である。自分のおかれた現状を認識し、このくらいでいいと冷静に考える。また、『黄金のカボチャ』の弟の例で見られるような、貧しいのは自分だけでなく、他の多くの人もそうであるから、その人たちをも同じように助けたいという「共生」の考えをもつことができることである。

このように、価値観としての知足をもつことが、利己心をコントロールするのに役立つであろう。人間はおそらく、この利己心と価値観のふたつのバランスをとりながら生きているのであろうが、この価値観が欠如していたり、弱かったりすると、利己心のほうが強くなって、それをコントロールできなくなってしまう。

要するに、人間としてどう生きるかという価値観をもち、それにしたがって行動することが、利己心をおさえることにつながる。自分の現状をわきまえた考え方こそ、価値観としての知足であり、この力を借りなければならない。

(4)「格差社会」という現実

現代は格差社会が顕在化しており、少数のきわめて豊かな人びとと、多くの貧しい人びとが出現しているが、5冊の絵本の世界もまさにこの格差社会にある。『くった のんだ わらった』に登場する殿様は、豪華な衣装を身につけているが、極度の肥満の体になっている。おいしいものをたらふく食べたからであろうか。そして、当然のことであるが、貧しさはまったく感じられない。

『炭焼長者』のなかの千石屋の長者もそれらしく立派な身なりをしているし、のちの炭焼長者となる男とその女房も同様である。『いっすんぼうし』のお姫さまも美しい着物を身につけている。それに対して、『やまいっぱいのきんか』のランフー、『石のししのものがたり』の弟、炭焼き男、青竹三本の男は、きわめて質素でみすばらしい身なりである。

象徴的な場面は、千石屋の息子と小作人の娘が生まれたときの絵である。前者が立派な布団にくるまれて寝ているのに対して、後者はワラのうえに寝かされている。この絵で貧富の差がはっきり示されており、まさに格差社会であることがわかる。また、『くった のんだ わらった』の結婚パーティで、出席者たちはお祝い用の衣装を着ているが、これは特別であり、日常はもう少し質素であったと思われる。

議論の最初で、貧しさが5冊の絵本の世界の基調であると述べたが、それとともに、このような格差社会でもあり、豊かな人びともいる。ここでもうひとつ、格差が固定化されていないことも明らかにしている。『炭焼長者』の千石屋の息子は怠け者であったために長者でなくなり、青竹三本

の貧しい男に転化している。そして、『石のししのものがたり』の兄も、長い期間働けないことで、貧しくなっている。

逆に、弟は仕事ぶりと信心を評価されて、貧しさを脱して豊かな生活を送れるようになっている。そして、『炭焼長者』の炭焼き男の妻になった小作人の娘は、多くの人を雇用するような長者になり、いっすんぼうしは特権的な階層のファミリーの一員に出世している。

これを見ると、貧しさも豊かさも流動的であり、完全に固定的に維持されるものではなく、もう一方のものに変わりうるのである。つまり、このふたつは変化し、転化する可能性がある。

(5) 「貧しさから豊かさへの転化の可能性」を支えるもの

それでは、貧しい人間が豊かになるという「転化の可能性」を生み出すのは、どのようなものであろうか。ひとつは、『石のししのものがたり』の弟の事例で、まじめに仕事を行って成果をあげ、その仕事がうまくいくようになったことに心から感謝することである。

この感謝はシシの心を動かし、“ごほうび” が与えられることになる。そして、このシシの心は彼の仕事ぶりを見てきた周辺の人たちの評価とおそらく同じものであり、彼がシシとともに、それらの人びとからも「信用」を勝ち得ていることを示していると考えたい。

仕事の遂行には、関係する周辺の人びとからの信用が大切であり、これが転化の可能性をもたらすのではないかと考える。仕事を行う場合、それを担当するのはその個人ではあるが、それは他者との関係のなかで行われる。『石のししのものがたり』の弟とならんで、いっすんぼうしの周囲からの評価は非常に高く、転化する可能性をもたらしている。彼の活躍ぶりは鬼退治以外の場面でもみごとであり、高い信用を得ている。

そして、もうひとつは、チャンスを活かすことである。この点では『炭焼長者』があげられる。金がすぐ身近にあるのに、その価値を知らずに働

くだけだった炭焼き男は、女房の言葉でチャンスを活かし、長者になっている。チャンスはそうそう多くはないであろうが、それがあると思ったら、勇気をだして活かしていくという考え方が大切である。

きびしい状況で働いている場合、それを積極的に改善しようとチャンスを求めている人間がいる一方で、不承不承であるものの、むしろ現状をうけいれて、それをつづけていく人間が実に多いのである。

その意味でいうと、青竹三本の男と一緒にいても仕方ないと思って別れを決断し、みずからの道を進んだ小作人の娘は、「逆境」というべき状況をチャンスに変えようとしている点で評価できる。塩一升の運命をもつこの女性は、これにより開花し、炭焼き男をサポートして長者になっている。

(2019. 1.25.)

